明珠

龍泉院
参禅会会報

3
昭61年4月8日

従容録に学ぶ（二）

第八則　百丈野狐

〔示衆〕　衆に示して云く、箇の元字脚を記して心に在けば、地獄に入ること箭の射るが如し。一点の野孤涎、嚥下すれば三十年吐不出。是れ西天の令厳なるにあらず。只だ獃郎の業重きが為なり、曽て悞犯の者ありや。

〔本則〕　挙す、百丈上堂するに、常に一老人あって法を聴き、衆に随って散ず。（閙中に静を取る。）一日、去らず。（従来、這の漢を疑著す。）丈乃ち問う、立つ者は何人ぞ。（事、交わりを解せず、客来らば須らく待すべし。）老人云く、某甲、過去迦葉仏の時に曽て此の山に住す。（元と是れ当家の人。）学人あって問う、大修行底の人、還た因果に落つるや。（但だ好事を行じて前程を問うこと莫かれ。）他に対えて道く、不落因果と。（一句合頭の語、万劫の繋驢橛。）野狐身に堕すること五百生。（你、因果に落ちずと道う。）今、請う和尚、一点語もて代らんことを。（甚の来由を著けんや。）丈云く。不昧因果と。（一坑に埋却せん。）老人、言下に大悟す。（狐涎、猶お在り。）

今回は、あまりにも有名な第八則「百丈野狐」の公案です。道元禅師はこの公案をもとにして、『正法眼蔵』中の大修行・深信因果という二巻を著されたほどです。

百丈山は、江西省の省都南昌市の西、約二百キロのところです。ピークを大雄峰といい、裾野には唐代の懐海が寺を創めました。寺の前に数ヘクタールもの田園を開き、自給自足の禅道場としました。四年前の初秋、私が訪れた時は、稲穂の黄波が続くかなたに立つ無人の粗屋が、往年の大道場をわずかに偲ばせるのみでした。

ところで、インド的な戒律から脱皮し、禅門独自の生活ルールである清規を創唱したり、かの「一日不作、一日不食」という名言を遺したのも、みな懐海禅師の偉業でした。以後、懐海は百丈の名で親しまれています。

さて、百丈が住持として大勢の修行者に対して盛んに説法していたころ、常に一人の老人がこれを聞いていました。説法が終ると姿をかくすのに、ある日、帰らずに残っていました。いぶかしんだ百丈が、あなたは誰かと聞くと、その老人は、「私は過去世の昔、この山の主でした。ところがある時、学道者が、久しく修行を積んだ有徳の人でも因果に落ちるのでしょうか、と質問したのに答えて、不落因果と答えたところ、野狐の身となってしまい、そののち五百生もの間生れ代っても、まだ人間に戻れません。どうか禅師さま、私が野狐の身から脱けられるような一語を下されませ」と語りました。そこで百丈は、「不昧因果」（因果の道理に随順せよ）と喝破するや、老人は言下に悟って野狐身を脱することができた。という面白い物語りです。

いうまでもなく、この公案は、因果の道理が絶対の真理であることを教えるものです。原因のない結果はないというのは、古今不変の真理です。道元禅師が「因果の道理、歴然としてわたくしなし」といわれる通りです。ただ、禅では道理を説くだけでなく、だからこそよい原因をつくり、良い結果がえられるべく、正しい日常生活や修行の努力をすすめています。

因果の道理の前には、いかなる大修行者でも、例外ではありません。たとい百丈山主でも、この真理に背いた罪の報いにより、五百生も野狐の身に落ち、そして懐海の一転語によって直ちに大悟徹底し救われたという物語りは、大へんドラマチックに富んでいます。真理を冒瀆した者の、深みにはまる罪業の恐しさ、そして、それを消滅転換させる禅の大機大用のすばらしさを、まのあたりに表現しているからです。このところを、よくよく参究すべきです。

万松は最初の「示衆」で、仏法を誤って理解することを厳しくいましめています。元字脚とは一字のこと。財産や地位など、心中つねに一物を持っていると、慢心が出て精神を迷わせてしまう、一度間違って飲みこんだ涎は三〇年も吐きだせないように、誤って学んだ先入観は容易に直せない、それは仏法ではなく、分別なき者の悪業の報いにすぎない、といっています。

仏法の道理は、すなおに学び、受けとめなければなりません。「万劫の繋驢橛」とは、杭につながれっぱなしのロバ、つまり不自由のことです。真理をすなおに信じない人には、永劫に心の自由はえられないのですね。

因果の道理は、一見やさしく、実は深い意味を秘めています。善因善果、悪因悪果は承知の上で、私たちは「悪いことをしていないのに、なぜこんな目に」「正しい者が報いられずに」などとこぼすものです。この時、因果の道理など空しい哲理にしか思いはしないでしょうか。

仏教は、決して果報を待つ教えではありません。八正道のごとく、正しい生活こそ人間の基本的な道だと教えています。結果を性急に求めるのは邪道です。ぐちの一つもこぼしたい時が実は大切です。こんな時、静かに自分を反省できれば、心のすばらしい進歩があるからです。「正しいのに」とはぐちです。正しい実践をするのがあたり前、正しくさえあれば、必ずよい報いがあることを信じなければなりません。

では、その信はどこからくるのか。それは実践です。正しい行いによって信はつちかわれるのです。だから、信と行は相即相関の関係にあります。「信現成（げんじょう）のところは、仏祖現成のところなり」（菩提分法の巻）とあるように、坐禅も信ですね。只管打坐になりきった坐禅が、信現成の世界にほかなりません。

因果の道理を、私たちは決して哲理とみてはなりません。そこには、参究すればするほど、私たちの生きざまを教えてくれる深い仏法の風光があるからです。

第三回成道会参加者一同（６０．１２．８）

第三回成道会(じょうどうえ)、盛大に行われる

明けの明星を見て、お釈迦さまがおさとりを開かれ、人間から釈尊となられたのが一二月八日です。これを記念して、当会では昭和五八年から参禅会員が主催する成道会が行われていますが、旧臘の一二月八日（日）に、第三回目の成道会が厳粛に実施されました。参加者は、会員三四名（男二七女七）、僧侶三名、それにご住職の合計三八名でした。朝九時から一時間の報恩坐禅、法要（般若心経の読経）、法語、点心（昼食）、記念撮影、茶話会というスケジュールで、午後一時半まで熱心に行なわれました。その中で、参禅一五年継続の高間利介さんがご住職より表彰されました。

このような仏教的な行事は、大勢で行うところに、衆力和合と照顧脚下の尊い結縁がなされるものといわれています。年ごとに盛んになっていきます成道会は、まさに会員皆々様の、参禅にたいする熱意のあらわれで大変嬉しいことでございます。これからも、毎月行なわれます参禅会のご縁を大切にしていきたいと思います。

昭和六十年十二月八日
成道会坐禅会差定

一、坐禅
一、止静　鐘三声
一、経行　鐘二声
一、放禅　鐘一声

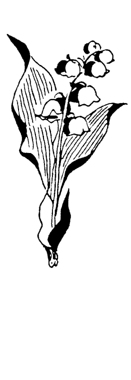
二、成道会
導師　龍泉院住職　椎名宏雄老師
一、散華曲　聖歌「法の御山」他一同着座
一、導師入堂　一同合掌
一、拈香法語　導師が釈尊の成道を讃えての漢文の言葉
一、三拝　導師に合わせて一同着座のまま三拝
一、般若心経　一同唱和（参禅要典十五頁）
一、三拝　導師に合わせて一同着座のまま三拝
一、表彰
一、導師退堂　一同合掌

三、法話
椎名宏雄老師
一、版三会　木版を三通鳴らす
一、開経偈　版終わると同時に木魚に合わせて導師着座で唱和する（参禅要典六頁）
一、三帰礼文　導師に合わせて唱和する（参禅要典十頁）
一、法話
一、普回向　参禅要典（八十一頁）

四、点心
一、版三会　木版三通一同入堂　合図の合掌の後着座
一、住持入堂　一同合掌
一、行鉢念誦
一、受食　五観の偈文を唱和する（参禅要典一〇九頁）

五、反省会
一、発起人挨拶　高間利介

以上



久参修治の功

―高間利介氏表彰―

昭和四六年七月、当参禅会の発足以来一五年間弁道された高間利介氏に対して、「第三回成道会」を期して龍泉院老師より「全機現」と鮮やかに大書された慶讃の額入り墨蹟が贈られ、参加者一同の盛んな拍手を受けました。

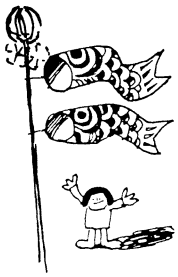
「全機現」とは宋代の有名な禅匠の円悟禅師の言葉で、「その機(はたらき)が今ここに余すところなく現成(げんじょう)していることである」、と老師よりお示しがあり、道元禅師も『正法眼蔵』全機の巻で拈提をされているともお話がありました。

茶話会の席上で挨拶に立たれた高間氏は、「今年一年を振り返って、進歩があったか停滞していたかは判断することは仲々難しい。雨垂れでも石に穴をあける、久しければ証(しるし)ありと申しましょうか、こう言うことを期待することは良いと思いませんが、私にとっては一五年間参らしていただいたことに対し、逆に御礼を申し上げたい。」と結ばれました。

高間さんは、地元で木工家具の工場を経営され、大勢の従業員を擁する株式会社「イヅミ」の社長さんです。礼に厚く慈心の深いお人柄に加え、各家庭や社会の道徳高揚にも熱心に努力される奇特な方として、地元の人びとや従業員から広く尊敬されています。

どうか今後とも、ますますご健康に留意されて、ご精進ご活躍なされますよう、お祈りいたします。

表彰された高間さん



坐禅との出合い

松戸市　四宮清二

「龍泉院の看板が出ている所の信号を右折すると近道だよ。」

入社以来の拾数年間、製品開発の仕事に従事していましたが、はじめて営業の仕事をすることになりました。右の看板の所を数回ほど通っているうちに、「参禅道場」と書かれているのが目にとまりました。

後日、仕事の帰りがけに龍泉院へ赴き、どうすれば坐禅会に参加できるだろうか、と考えながら庭を歩いたのを思い出します。それ以来、坐禅会に参加し、もう三年になります。

思えば、看板で坐禅の文字に目を引かれたのは、それ相応の事由があってのことでした。

昭和三九年、学生の生活に終止符を打ち、松戸の会社に入社し、独身寮に住むことになりました。自由な学生生活と比較すると、会社の仕事はつまらない日々に思えました。

会社がひけると寮のベッドに横たわり、西田幾太郎の『善の研究』や全集を毎月取り寄せて読んでいました。しかし、非常に難解で、ほとんど理解できませんでした。

よく友人が、「こんなものが何の役に立つの」といって、ひやかされたものです。でも、何か魅かれるものがあって、分らないなりに毎月配本される本を楽しみにしていました。重ね重ね読んでいるうちに、その思想の根本には、東洋哲学や仏教の世界が、深奥に潜んでいるように思われました。

私の高校時代（四国の高校です）の数学の教師に、よく仏教の話をする方がいました。ずっと後になってわかったことですが、数学者の岡潔さんが広島で教鞭をとっていた頃、その教師は学生として教えを受け、岡先生の影響を受けたものと思われます。

坐禅会に参加するようになってからの私は、物事の観方や人生感が、大きく変ったように思います。そうした発見の例を一つ申しあげます。

私は六年前からジョギングを行っていますが、ある寒い日曜の早朝、八柱霊園にジョギングし、いつもの場所に来ました。すると、松の木の間から太陽の光線が芝生を照らしていました。寒い朝なので霜柱が立っていましたが、太陽の光で溶け、それが芝生一面に色とりどりの宝石を散りばめているのです。一瞬、私はあまりの美し

初接心・思うまま

柏市　武田博志

はじめて接心を知ったのは、鎌倉の寺を舞台にした小説のなかだった。静寂ななかに凛として張りつめ、充足した時の流れが強く印象に残った。御住職の紹介で八千代市長福寺の接心に参加することになり、それが現実となった。

手渡された日程表を見てびっくりした。三日に亘って分刻みでぎっしり書き込まれていたからだ。

三月七日午后より接心が始まり、薬石という夕食をはさんでの坐禅が九時に終る。翌朝は三時半の振鈴で起こされた。洗面後すぐに暗闇のなかを坐禅堂に入り足を組む。ローソクの灯るだけの薄暗いなか、両隣から吐かれた白い息が壁にぶつかり消えてゆく。起きがけの坐禅は不思議とよく坐れた。頭のなかは冷気で凍てつき空っぽになったよう。寝呆けているのでも力んでいるのでもない。

この日は一〇炷もあった。一炷を終えると行茶が始まる。礼のあと一斉に熱い湯をすする。何だろうかと味の記憶をたぐると、それは伏見の八幡宮で飲んだ甘酒の味だった。尋ねると生姜の砂糖湯、寒いなか、ふふっーと吹き冷しながら飲む生姜湯は喉を通って体中を温めてくれる。白々と明るくなってきた境内を通って、再び坐禅堂に戻り二炷に入る。

朝課を唱和し、小食という朝食をいただく、粥にごま塩、梅干とたくあん、食事前には単の上で朝課と日中、晩課があり、それぞれ祇園正義・発菩提心・自受用三昧を唱え、就寝前の坐禅には普勧坐禅儀を斉唱する。かつて読んだ小説にあった雰囲気が、接心の進行とともに色濃く実感されていく。

お坊さんというと、常に人波のはるか前方で経文を唱えている後姿しか思い出せない。自分とは言葉も人格も接することのできぬ存在と思っていた。しかし接心に参加していると、今までと全く違う僧の姿に触れられた、坐禅堂では私はこの単に、あの痩身の僧は向かい側で、隣の単には太鼓をたたいた僧が私と並んでいる、老師も同じ高さの向こうで同じ姿勢をしている、食事も同じ物を同じだけ一斉に食べ始め、同時に箸を置く。

個が尊重されつつ常に同という文字が対抗することなく意識される。振鈴に始まり開枕まで坐禅に終始する生活を、修行する僧の方々と共にできる、それはどんなに恵まれたことだろう。青年僧の間さのために茫然となり、しばらくして、無意識のうちにそれを取ろうと手を出し、無駄であることが分り、手を引っこめました。

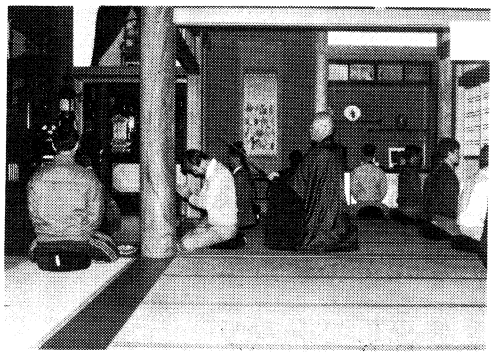
松の緑の本当の緑、そして七色の宝石の場所を去るのがもったいない気持になったとき、感激は薄近な存在は大きい。隣の僧の姿はいつも自分への励ましであり戒めとなった。

食前に五観の偈を唱えていて、ふと懐しい気持になる、小学生の頃、狭い菜園で親の後から大根やじゃがいもを堀り起こす手伝いに土まみれとなった。夕暮にスコップやくわの汚れを冷たい水で洗い、夕食には手を合わせてから箸をつけた。あの感触と記憶が蘇ってきた。親の庇護の下、日々の糧を得る苦労を知らない、仏壇のなかった私の家には仏に合掌する習慣はなく、意識も希薄だった。しかしそれはある一日を疑いもなく黙々と収穫作業にあたり、そして与えられたものには手を合わせるという感謝の基本形だったのかもしれない。

昨今の我身は、忙しい忙しいと時計と財布の中身を幾度も確認しながらの毎日。目はキョロキョロ手足はバタバタ動いていても、まるでからくり人形のよう。できるだけ煩雑なものを遠ざけるように洗面用具だけの身仕度だった。それが、この数日間に手足が空を切っているイメージから解き放たれた。僧堂を去るとき、歩く私の背中にたくさんの人の温かい支えの手を感じた。

れ色は褪せていました。

緑が本当の緑であり、宝石の色が褪せることのないように、すなわち、色褪せることのない活発々とした自分の人生を現出させるために、坐禅をつづけたいものです。



第三回成道会の一コマ

只管打坐への道

習志野市　沢村国勝

原稿を依頼されてから、早や一ケ月を迎えました。書くことを苦手としている者にとって、大変な仕事となりました。あれも、これも、と思いながら、整理してみるとバラバラなのです。まとまりがなくしまりのないこと、甚だしいのです。考えてみても深みにはまるだけで、そのひどさに呻然となりました。

だけれども、そう思ったとたんなんとなく分ってきたのです。なぜ参禅であり、道元であり、『正法眼蔵』であるか、少しではあるが視点が定まってきたのです。禅的思考をとり入れたら、すぐに視点及び、構想が成りたったのです。

今、こうして書きたなら、締め切り前のこの文章が、不思議にスラスラ筆を運ぶ自身を考えながら、その元をこれから思いつくままに、『徒然草』並に（すみません、随筆は大好きですので……）書いてみたいと思います。

数年前、朝日新聞の「こころの書から」というコラム欄に、立原正秋著『冬のかたみに』という本の紹介がありました。早速、買い求め読んでみた半自叙伝風のこの本は、禅に詳しく、詩、陶器、能等に明るいこの作家の凝縮された半生が語られていました。

しかし、小説は虚構であり、本文の記述については、事実と虚構を区別しておく必要があると思うが、その生き方には、他人が真似の出来ないスゴサがありました。前半生の中には、孤独、克己、自力が、いかに厳しいものであるかを実感として知りえているからです。随筆も、なかなか良いものがあり、作家自身「これ以上、随筆ばかり書いていると、肉体を切り刻む感じで疲れてしまう」という内容の文章であったように記憶しています。晩年、五〇数歳で他界する病室に、終生を共にした『正法眼蔵』を持参したと聞いております。恋愛小説作家という定評の中にありながら、生き方は、別の世界にあったとは驚きでした。己の人生を精一杯生き続けた姿に深く感銘を受けました。

その頃、私は、失業中で、時間的に余裕もあり、一連の著作を徹底して読んでみたのです。恋愛小説です。いい年をしてと笑われそうですが、その時は『冬のかたみに』の内容があまりにも強烈であった為に、以後、生き方の物語集として読んでみたのです。博識な頭の良い作家の著述は、読後に心地よささえ感じる程でした。

そのころ、私は『正法眼蔵』をひもといていたのですが、一向に分らないのです。本当に分らないのですから万歳です。ところが、他方で、見事に坐禅感を述べているくだりに接し、天と地ほどの隔たりを感じました。そこで、発心して、腹をすえて取り組む必要を感じたのです。

本題については、実はあまり述べたくないのです。何故ならば、世の中には、その道の専門家がおられ、私などが意見を云う立場にはないのですが、雑感ですのでたどりついたプロセスだけを簡潔に申し上げます。

今までにも、何冊もの道元に関する本を読んでみても、分らないことは、さきに申したとおりです。

ところが、当会の参禅と、『正法眼蔵』提唱で分ってきたのが、正に「只管打坐」なのです。あまりにも無味乾燥な結論ですが、只管に打坐する、それしか説明のしようがありません。

作刀と坐禅 (三)

――不立文字――

船橋市　森岡俊雄

題目の通り二回書いて参りましたが、作刀は兎に角、坐禅についてなど書けるものではありません。私の如き成っていない坐禅では、「禅」のことなど書けるものではありません。

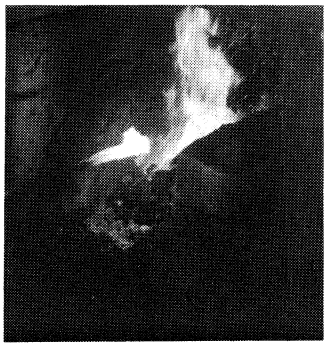
それで本稿の最後に、椎名老師の愚弟子として、成っていなくとも修った禅がどう仕事を変えていったかを、現物（拙工作日本刀）により見て戴くつもりです。

「作刀について」と大学あたりで立派な論文を書いて見たところで、日本刀製作に関する限り三文の価値もありません。現に東大工学部長でおられた故工学博士俵国一先生が、吾が師笠間繁継を助手に使い、論文としてかなり長く立派にまとめられました。そして此の論文の値打は、他の工作冶金等には充分立派に役立っている事と存じますが、直接刀を打つ為には何の役にも立っておりません。これは何故か又誰の責任か、勿論私

共刀工の責任であります。

刀工にも大学出の人は居ります。私も曲りなりにも東京府立化学工業学校を出て居ります。然し発明王と言われたエヂソンは小学校四年しか出て居りません。私には実験工作に関する限り、彼の億分の一の頭も実績もありません。これは何故か。無論頭の構造が「月とスッポン」であること勿論でありますが、一番大事なのは私に工作の型が出来ていないのが原因です。しかも、この型は無形の型でして、文章で表現することは実に難しいと思います。

現在最大の刀剣誌『美術刀剣』に作刀について書いた人は、居ることはおります。然し実際に作刀の出来ない人で、作刀の論文を書くのはおかしな事です。又、たかが職人の私です。文章で作刀を見たこともない人に作刀を判って戴く事は出来ません。いやどんな文才のある大学者だって不可能です。まして自分で作刀が出来ずに、作刀の事を書くのは間違っています。



火床(ほど)での鍛え

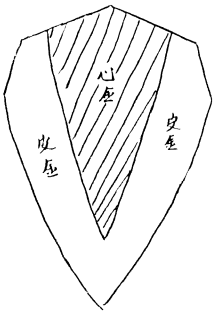
私の友人で『美術刀剣』に作刀の基本として鉄鋼の状態図を書いてる人がおりますが、炭が火になって鉄鋼に熱が伝導していく状態は判っては居りません。仮にこれが判り立派な論文が出来ても、今の日本には審査出来る先生は居ないでしょう。物理の大家が宮本武蔵の『五輪書』を読んでも、なんのことか全然判らないことと同じで、間合(まあい)だの、後の先を取る、などは時間が根本的に判って見たところで判らんでしょう。

こう書いて見ますと、道というものは行（修行）が無くては全然駄目でしょう。仏教学者と僧侶が一致している方もありましょうが、少ないのではないでしょうか。作刀を見た事のない方に、判るように書けるものではありません。どんな大学者でも文章家でも。こう言ってしまいますと話になりません。ではどう話を持って行くか。

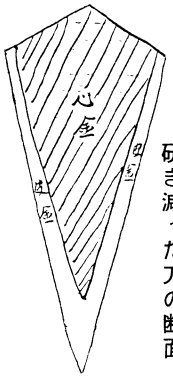
第一に、作刀を見て戴く以外に方法がありません。

第二に、鎌倉期以降の刀と拙工の刀を比較して戴くより方法はありません。特に他工の現代刀と拙工の近作を、直接両手に持って見て戴けば判ります。この原理は何か。

私など着物や洋服の心得などは全くありませんが、二万円の洋服と二〇万円の洋服とを並べて見れば、どちらが良いのか一目で判ります。本来「刀」は実戦で使うもので、「観る」ものではありません。然しながら、比較するにしても、古い刀に関する限り材料試験をすることは出来ません。なぜか。刀は古備前を除いて複合作品です。従って古い刀程、研ぎ減っていると見なければなりません。研ぎ減った刀は殆んど心金という事になり、切れ味は変りませんが曲り易くなります。



甲伏(こうぶせ)作り刀の断面



研ぎ減った刀の断面

此の所は素人には判り難いと存じますが、図に書けば判ります。なお「心金(しんがね)」とは、折れを防ぐ為、数回鍛練された低炭素鋼です（〇・三％C）程度）。別図、断面図をご覧下さい。従って、現代刀が曲りには一番強いと言う事になります。これは先年試し切りの会があって実験した事ですから確かです。また鎌倉期の研ぎ減ってない刀は、殆んど国宝・重文ですから、試し切りなどすること不可能です。従って「見場(みば)」のみにより良否を鑑別いたします。

現在は「見場」さえ良ければ実用性の良否はどうでも良い、と言う刀工も居ます。これは良くありません。「折れず、曲らず、良く切れて、使い良い」これは先祖伝来の伝統です。しかも「見場」の良否と「実用性」は、必ずしも一致しません。

いろいろ愚にもつかぬ事を書きましたが、先づ作刀の実際を見てもらうべく、参禅会の一部の人に見て戴きました。また一振でも刀を見る事から始めねば判らぬと思い、一月二六日の参禅会に、「窓明け」ではありますが拙工作刀を持参し見て戴きました。「窓明け」とは刀の出来の良否を見るため、一部分を研ぐ事です。（以下次号）

龍泉院参禅会簡介

一、日時　毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと。）

一、坐禅　止静（しじょう）　鐘　三声　坐禅
　　経行（きんひん）　鐘　二声　経行
　　放禅　鐘　一声　放禅

一、講義　木版三通　開経偈を唱えて『正法眼蔵』の提唱を聴く
　　講師　龍泉院住職椎名宏雄老師
　　昭和六〇年一二月より「坐禅箴」の巻を提唱中

一、座談　自己紹介の後、茶を喫し座談
　　正午解散

一、参加資格　年令、性別を問わず、どなたでも参加できます。

一、会費　無料

一、成道会坐禅
　　月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜（本年は一二月七日）。釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雑記

〔参禅会記録〕（　）内は座談の司会者

六〇年
一〇月二〇日　二四名（青葉　雅次）
一一月二四日　三〇名（杉浦上太郎）
第三回成道会　一二月八日　三八名
成道会幹事　寺田健二
同　徳山　浩
一二月二二日　二四名（四宮　清二）

六一年
一月二六日　三〇名（五十嵐嗣郎）
二月二三日　三二名（中井　康裕）
三月二三日　二三名（金崎　史）

▼千葉県曹洞宗青年会主催本年度の「接心」が八千代市の長福寺に於て去る三月七・八・九の三日間行われ、武田博志氏が参加されました。ここにその感想をお書き頂いた次第です。

▼「一泊参禅会」来る六月七、八日（土・日曜）霊鳥「仏法僧」の鳴く緑深い「迦葉山龍華院」で一泊参禅を企画しております。奮って参加をお待ちしております。

▼「明珠」第三号を陽春の好時節にお届けいたします。

本号が出来するころは、毎年恒例の〃筍堀り〃と言うことになります。毎回老師がお示しになっている『従客録』の中に〃筍〃の出ているのを知りました。第七〇則「進山問性」がそれです。我々の自然へのアプローチと禅匠のそれとの相違を参究されるのも興味深いことと思います。

▼道元禅師に関する本は、正に雨後の〃筍〃の如く出版されております。しかし「本」だけでなく坐禅で道元禅師にアプローチする人は少ないことです。禅師も「正師について坐禅をせよ」と繰り返しお示しになっておられます。

「本」から妙修の坐禅へ伺おうとする人々は多いと思う。〃筍〃が自分で自らの皮を剥ぐように、観念の〃皮〃を剥いで真の「坐」に直参いたしたい。（節光記）

●発行　天徳山龍泉院　千葉県沼南町泉81　☎0471(91)1609
●印刷　岡田印刷株式会社　柏市高田1116-45　☎0471(43)3131